

伊勢国府跡 2

2000年3月

鈴鹿市教育委員会



6AJC-A区 建物SB91(東から)



6AJC-D区 建物SB97(北西から)

例言

1. 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市教育委員会が1999年度に実施した長者屋敷遺跡ほか発掘調査等事業のうち伊勢国府跡（長者屋敷遺跡・第11次）の調査概要をまとめたものである。

2. 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体 鈴鹿市教育委員会（教育長 山下健）
 調査指導 川越俊一（奈良国立文化財研究所）
 高瀬要一（奈良国立文化財研究所）
 仲見秀雄（鈴鹿市文化財調査会会長）
 八賀 晋（三重大学名誉教授）
 渡辺 寛（皇學館大學教授）
 文化庁文化財保護部記念物課
 三重県教育委員会生涯学習課文化財保護室
 三重県埋蔵文化財センター

調査担当 鈴鹿市考古博物館

組織及び構成

鈴鹿市考古博物館長	林 銀哉
館長補佐兼埋蔵文化財係長	中森成行
埋蔵文化財係	岡田雅幸
	新田 剛
	伊藤朋之
	吉田真由美
	林 和範

3. 調査を実施した箇所及び面積は以下のとおりである。

Tab.1 調査区一覧

地区記号	所在地	面積㎡
6AJA-H	三重県鈴鹿市広瀬町字矢下1176番	188.4
6AJA-FG	三重県鈴鹿市広瀬町字矢下1175番・1175番1	91.5
6AJC-A	三重県鈴鹿市広瀬町字矢下1093番	332.8
6AJC-D	三重県鈴鹿市広瀬町字矢下1130番	250.3

4. 調査期間は1999年10月1日から2000年2月8日までである。

5. 現地調査は前記係員のうち主に新田・伊藤が担当した。

6. 本書の編集・執筆は新田が担当した。

7. 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕江藤栄生・江藤経子・小河茂・小河清角・鈴木義孝・仲南寿夫・伴安治・水野ひさ子・水野豊・森明

〔屋内整理〕片岡貴美子・加城陽子・神田梢・杉本恭子・真鈴川千津子

8. 今回検出した遺構は以下のとおりである。

Tab.2 遺構一覧

SB ; 建物	SD ; 溝	SK ; 土坑	SP ; 柱穴
91・97	04・39・87・88・90・95・96	89	92~94・98~102

9. 座標は国土座標第Ⅴ系を用いた。図中の方位は座標北を示す。

10. 調査区は必要に応じ、3 mグリッドに分割し、北西のX・Y座標から下3桁を組み合わせてグリッド名とした。

例) X=-1 2 4 0 4 8・Y=4 5 6 3 4の場合、0 4 8・6 3 4

11. 掲載遺物中の※は参考資料で、鈴鹿市広瀬町矢下地内において1997（平成9）年度に実施した緊急調査によるものである。

12. 本調査にかかる遺物・図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

調査及び報告書刊行にあたっては、地権者ならびに地元各位をはじめ下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

浅尾悟・大橋泰夫・岡田登・倉田直純・坂井秀弥・坂文治・竹内英明・田中屯・谷本鋭次・辻あき・辻公則・森尾忠信・山澤義貴・山田猛・山中章・山中敏史

本文目次

I. はじめに	1	IV. まとめ	10
II. 検出遺構	3	英文目次・要旨	15
III. 出土遺物	5		

カラー図版目次

1. 6AJC-A区建物SB91 (東から)	巻頭	2. 6AJC-D区建物SB97 (北西から)	巻頭
------------------------	----	-------------------------	----

挿図目次

Fig. 1 軒丸瓦の型式	6	Fig. 4 建物SB97の想定プラン	11
Fig. 2 軒平瓦の型式	7	Fig. 5 政庁の規格	13
Fig. 3 建物SB91の想定プラン	11		

表目次

Tab. 1 調査区一覽	例言	Tab. 5 軒瓦地点別出土点数	9
Tab. 2 遺構一覽	例言	Tab. 6 政庁の規格	13
Tab. 3 調査履歴	2	Tab. 7 周辺官衙の規格	14
Tab. 4 軒瓦一覽	8	Tab. 8 報告書抄録	49

図版目次

Plate 1 周辺の遺跡(1:100,000)	17	Plate18 平瓦 (1:4)	37
Plate 2 調査区位置図(1:5,000)	18	Plate19 文字瓦・土師器・須恵器・山茶碗(1:4)	38
Plate 3 調査区位置図(1:1,000)	19	Plate20 6AJA-H区(北西から)/6AJA-FG区(北から)	39
Plate 4 6AJA-H区平面図(1:200)	21	Plate21 建物SB91他(東から)/溝SD04(西から)	40
Plate 5 6AJA-FG区平面図(1:200)	22	Plate22 建物SB97(北西から)/建物SB97土層断面(北西から)	41
Plate 6 6AJC-A区平面図(1:300)	23	Plate23 6AJA-H区(北西から)/溝SD87(東から)/6AJA-FG区(西から)/溝SD04土層断面(北から)/指導委員会(南東から)/溝SD90(東から)/溝SD39(北から)/溝SD39土層断面(北から)	42
Plate 7 溝SD04平面図(1:100)・土層断面(1:50)	24	Plate24 建物SB97(北東から)/溝SD95(北東から)/建物SB97(北東から)/SP100(北から)/SP101(北から)/SP102(北から)/SP99(北から)/SP100(北から)	43
Plate 8 建物SB91・溝SD39・SD90平面図(1:100)	25	Plate25 軒丸瓦・軒平瓦	44
Plate 9 溝SD39-90土層断面図(1:50)	27	Plate26 文字瓦	45
Plate10 9次調査A区平面図(1:100)・土層断面図(1:50)	28	Plate27 文字瓦・須恵器・山茶碗	46
Plate11 6AJC-D区平面図(1:100)・建物SB97土層断面図(1:50)	29	Plate28 軒丸瓦・軒平瓦	47
Plate12 軒丸瓦(1:4)	31	Plate29 軒平瓦・丸瓦・平瓦	48
Plate13 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦(1:4)	32		
Plate14 軒平瓦(1:4)	33		
Plate15 軒平瓦(1:4)***	34		
Plate16 軒平瓦(1:4)	35		
Plate17 丸瓦・平瓦(1:4)	36		

I. はじめに

1. 遺跡の位置

鈴鹿市広瀬町に所在する長者屋敷遺跡は、これまでの調査によって奈良時代における伊勢国府跡であることが確認されている。遺跡をのせる標高約50mの台地は、内部川を軸とした水沢扇状地の扇端近くにあたり、地表はいわゆるクロボクに覆われる。水はけが良く、近代以降はマンボと俗称される灌漑施設が発達した。段丘下南方に広がる水田地帯は鈴鹿川あるいはその支流である安楽川によって形成された谷底平野で、耕地整理が実施される1990年代半ば頃までは条里制の名残を留めていた。比高差は約20mを測る。

鈴鹿川沿いの台地上には時代を問わず高密度に遺跡が残されている。律令期は官道の経路に当たり、この地域を代表する官衙・寺院遺跡が連なる。長者屋敷遺跡から東北東約6kmには伊勢国分寺跡や河曲郡衙が、西南西約10kmには推定鈴鹿関跡が所在し、鈴鹿川・安楽川の合流点を挟んで南約3.5kmには9世紀以降の国府跡と推定される三宅神社遺跡がある(PL1)。

2. 遺跡の範囲と現況

大量の瓦が分布する東西約600m・南北800mが国府の推定範囲で、ごく一部が亀山市にも及んでいる。北限には「金蔵(かなやぶ)」と称される山林があり、政庁は南端に位置する。国府跡の周辺には縄文・弥生・古墳・鎌倉時代の遺物がわずかに見られ、周知の包蔵地の範囲はさらに広がる。

遺跡の大部分を占める鈴鹿市側は市街化調整区域で、農地として利用されている。

3. 調査履歴

これまでの調査によって国庁院をはじめとする国府関連の建物が検出され、ある程度のブロックをなすことが分かりつつある(PL2)。そこでこれらの建物群を呼び表す際には、付近の代表的な小字名を便宜的に用いてきた。以下に用いる地区名も明確に字界に従ったものではないことに留意されたい。

調査回数については、鈴鹿市教育委員会による最初の調査となった1992(平成4)年度を第1次とし、以後緊急調査も実施されてきたため今年度は8年目第11回を数えることとなった。その一方京都大学による1957(昭和32)年の調査や三重県埋蔵文化財センターによる緊急調査には調査回数

が付されることがなかった。そこで枝番を添えるなどして別表のとおり整理しておきたい(Tab.3)。

京大調査(1957年) 歴史地理学者藤岡謙二郎を中心とする京都大学の先見的な学術調査で、南野地区(A地点)と矢下地区(B地点)において実施された。南野地区では部分的な掘削を伴う調査が行われ、礎石建物が確認された。矢下地区では山林内に残存する土壇の地形測量と瓦露出層の断面観察が行われた。遺跡の北端に位置する通称「金蔵」については、地権者の承諾が得られず、調査を断念している。調査報告において藤岡は、金蔵を「代表的建物」、「B地点」を「羅城の性格を備えたもの」とし、遺跡全体としては軍団を兼ねた初期国府跡と結論づけた。

1次(1992年度) 南野地区において藤岡による「A地点」の再調査が行われ、現存する礎石建物の規模が確認された。その他荒子・長塚地区において調査が実施され、長塚地区からは礎石遺構が検出された。

2次(1993年度) 藤岡による「B地点」の範囲確認のため矢下地区に調査区が設定された。東内外周溝・後殿・北軒廊・西外周溝・東隅楼にトレンチが設けられ、当地点が政庁跡であるとの確信が得られた。明瞭に残る正殿・後殿・北軒廊などの基壇は、近江国庁に類似した建物配置をとるとして改めて注目されることとなる。軒廊基壇が後殿とは別工程により築成されていることや、基壇周りの整形・化粧の欠如が観察された。

3次(1994年度) 2次同様矢下地区において実施され、西脇殿・西内外周溝・西軒廊・正殿の一部が調査された。西脇殿における礎石の抜き取り痕跡や足場穴から正殿・後殿・脇殿の柱間が想定され、伊勢国庁の建物規格を知る上で大きな進展があった。この調査でもやはり基壇化粧は認められず、政庁の未完成廃絶が議論された。

4次(1995年度) 政庁の西築地・西隅楼・後殿・北外周溝が確認された。3か年にわたる政庁城の調査で、南辺を除きその範囲が確定する一方、西隅楼上における同時代の土坑の検出や完形軒瓦の大量出土など、政庁院の創建・廃絶の過程が問題となった。

3-2次(1994年度)・4-2次(1995年度) 三重県埋蔵文化財センターによる緊急調査で、仲土居

地区で実施された。検出された20数条の溝から国府城を形成する方格地割の存在が導かれ、平安期の畜宮における方格地割と対比された。

5・6次(1996年度) 農業基盤整備事業・道路改良事業に伴う緊急発掘である。丸内地区で実施された5次調査では、奈良時代の竪穴住居2棟と溝が検出された。矢下地区における6次調査では国府との関連性が乏しい溝2条が検出されたのみである。

7次(1996年度) 1次調査における南野1調査区の東隣で実施され、新たに瓦葺き礎石建物の基礎基礎(SB08)や建物に伴う溝が検出された。SB08の北からは当遺跡で唯一の掘立柱建物で

あるSB09が検出された。溝内からは政庁でも出土例のない鬼瓦片が得られている。

8次(1997年度) 政庁と並んで軒瓦が多く分布する長塚地区において実施され、南北棟の基礎地形とその建物に由来する倒壊瓦が検出された。

9次(1997年度) 道路改良に伴う緊急調査で、政庁南辺部を中心に調査が実施された。南築地内溝からは大量の瓦類とともに礎石が出土した。

10次(1998年度) 8次調査区の東及び北において調査区が設けられ、新たに東西棟の基礎地形3棟分が確認された。土坑や溝からは全体形を知りうる鬼瓦片が出土した。

Tab.3 長者屋敷遺跡調査履歴

次数	調査年度	調査区名	所在地	調査期間	面積	調査原因	概要
プレ1次	1967(昭和32)		広瀬町字南野 A地点 B地点 広瀬町字矢下			京大考古	礎石建物 基礎
1次	1992(平成4)	長塚1 南野1 荒子1	広瀬町字長塚1247,1248 広瀬町字南野971 広瀬町字荒子981	921110~930129	110 115 110	学術	礎石遺構 礎石建物 瓦溜・溝
2次	1993(平成5)	6AHI-F 6AJA-A-1 6AJA-A-2 6AJA-A-3 6AJA-D 6AJD-A	広瀬町字仲起1226 広瀬町字矢下1134 広瀬町字矢下1134 広瀬町字矢下1137 広瀬町字矢下1140 広瀬町字矢下1141	931129~940228	62 38 33 18 32 55	学術	政庁西外溝 政庁後殿・軒廊 政庁後殿 政庁東隅楼 政庁東内溝・東外溝 政庁東内溝・東外溝
3次	1994(平成6)	6AJA-A-4 6AJA-J	広瀬町字矢下1132,1133 広瀬町字矢下1131	941006~941227	750	学術	政庁西脇殿・正殿・西軒廊 政庁西脇殿・西内溝・西外溝
3-2次	1994(平成6)		広瀬町字仲土居 龜山市能褒野町字仲土居	940601~940817	2700	県緊急	溝
4次	1995(平成7)	6AJA-A-5 6AJA-A-6 6AHI-B	広瀬町字矢下1132,1133 広瀬町字荒子1135 広瀬町字仲起1227-1	950920~951219	254	学術	政庁西内溝・西隅楼 政庁後殿 政庁北外溝
4-2次	1995(平成7)		広瀬町字仲土居 龜山市能褒野町字仲土居	950605~950713	1600	県緊急	溝
5次	1996(平成8)		広瀬町字丸内	960620~960716	133	市緊急	竪穴住居・溝
6次	1996(平成8)		広瀬町字矢下	960625~960719	288	市緊急	溝
7次	1996(平成8)	6AGE-A	広瀬町字南野972,972-1 972-2,973	961007~970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝
8次	1997(平成9)	6AFB-A	広瀬町字長塚1279-2	971016~980210	632	学術	倒壊瓦・礎石建物・溝
9次	1997(平成9)	A地区 B地区 C地区	広瀬町字矢下 広瀬町字矢下 広瀬町字仲起	980223~980320	21 26 5	市緊急	政庁南辺部 政庁西脇殿 溝
10次	1998(平成10)	6AFB-B	広瀬町字長塚1279-3,1279-5	980901~981228	1014	学術	礎石建物・溝・土坑
11次	1999(平成11)	6AJA-H 6AJA-FG 6AJC-A 6AJC-D	広瀬町字矢下1176 広瀬町字矢下1175,1175-1 広瀬町字矢下1093 広瀬町字矢下1130	991001~000208	188.4 91.5 332.8 250.3	学術	溝 遺構なし 溝・礎石建物 南門

II. 検出遺構

1. 基本層序

基本層序及び層厚は以下のとおりである。

I層：表土。黒ボクからなる耕作土。下面が遺構検出面である。10～30cm。

II層：黒ボク土。10cm。

III層：漸移層。5～10cm。

IV層：褐色砂質シルト層。以下がいわゆる地山層。10～30cm。

V層：黄褐色砂質シルト層。場所によっては認められない。50cm。

VI層：礫混黄褐色砂質シルト層。

II・III層は6AJC-A・6AJC-D区の一部においてのみ残存する。政庁や周辺官衙に関連する溝は通常VI層上面付近まで掘り込まれるが、II～V層が一定しないため、検出される溝の現存深度も一律でない。建物基礎の底面はおおむねIV層上面から下面の間に収まり、II・III層が削平されている場合は掘込地形（じぎょう）の痕跡をとどめないこともある。

2. 政庁東方地区

①6AJA-H区（PL.4）

政庁東辺の30m東において調査区を設定した。南北50m・東西20mの範囲内に幅1mのトレンチを設定し、遺構が検出された部分を広げ、面的調査を実施した。遺構検出面はI層を30cm除去したIV層上面である。

調査区北辺から溝SD87・溝SD88・土坑SK89が検出された。調査区中程から南にかけては、現代の溝が検出されたのみである。溝SD87・溝SD88・土坑SK89は一部土層観察用の畦を残して完掘した。

溝SD87 幅2.6～3.0m・深さ12～20cmの東西溝。土師器・内面黒色土器・須恵器・軒平瓦片などが出土した。土器には図示できるものがないが、層厚の割には比較的豊富である。溝底面はVI層の礫が目立つ。

溝SD88 調査区北東で検出された南北溝。深さ20～30cm。幅は2m以上である。瓦片が出土した。土坑SK89 溝SD87の南に近接して検出された。64cm×74cmの楕円形を呈し、深さ18cm。土師器片が出土した。

②6AJA-FG区（PL.5）

政庁東辺の東に隣接して調査区を設定した。幅1mないし3mのトレンチを設け、I層を約30cm除去したIV層上面において遺構検出を試みたが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

3. 政庁西方地区：6AJC-A区（PL.6）

政庁西辺にかかる調査区である。市道の舗装工事に伴う調査（9次）で政庁西側において瓦を多く含む南北溝が検出されており、建物跡の存在が想定されていた。東西50m・南北18mの範囲に幅1mのトレンチを設定し、遺構が検出された部分のみ拡張することとした。

遺構検出面は、表土を10～20cm除去したII層ないしIII層ないしIV層上面である。調査区東辺からは政庁西外溝SD04が、調査区西半からは南北溝SD39・東西溝SD90・建物SB91・足場穴SP92～94が検出された。溝SD39に1箇所、溝SD90に2箇所設けたサブトレンチについては底まで完掘し、溝SD39・90の上層を部分的に掘削し、露出させた瓦については取り上げを実施した。足場穴SP92～94は5cm程掘り下げた。

建物SB91（PL.8） 柱の痕跡や建物基壇はいっさい残されていないが、瓦を含む溝SD39及び90に取り囲まれていること、掘込地形を一部にとどめること、建築あるいは解体用の足場穴と見られる小柱穴を伴うことなどから瓦葺礎石建物と判断される遺構である。棟方向はほぼ座標方位に合致する。

基礎地形の残りは極めて悪く、溝SD90の北に南北4.6m・東西1.8m程が平面観察され、東端はバッチ状となる。基壇範囲は溝に囲まれた範囲に相当するものと思われ、9次調査の成果を加味すれば、基壇の東西長が2.1m程の東西棟が想定される。

基礎地形がその底面付近のみをとどめているせいもあって、明確な版築は認められない（PL.9）。柱穴SP92～94 溝SD39の西辺上端に沿って検出された。足場穴と考えられる。短径20～26cm・長径26～42cmの楕円形を呈する。SP92とSP93の間隔は1.7m、SP93とSP94では1.6mで、溝SD90の北辺上端とSP92とは約4.2m

離れる。5cmほど掘り下げたところ、ほぼ底面に到達した。柱筋あるいは柱間の延長線上に位置するものと見られる。

溝SD39・90 (PL.8) 建物SB91の東及び南に接する溝である。SD39は幅1.3~1.9mで、深さは70~80cmである。SD90は幅1.8m程であるが、場所によっては南側に不定形の土坑が付加されている。

溝の埋土は大きく3層に分かれ(PL.9)、瓦を中心とする遺物は中層の上位あるいは上面に集中する。9次調査ではSD39から完形の丸瓦が数点出土したが、今次の調査ではSD39・90ともに細片が多い。SD90で中層まで掘り下げた部分では、とくに瓦が密集し、文字瓦も比較的多く含まれる。図示可能な土器としては須恵器長頸瓶底部がある。

溝SD04 (PL.7) 幅18mに及ぶとされる政庁西外溝の一部を底まで掘り下げた。検出面からの深さは約1mで、埋土は大きく3層に分かれる。上層はしまりが無く、近世以降から現代にかけて堆積したもの、中層は鎌倉時代以降に堆積したもの、下層は8世紀後半以降に堆積したものと考えられる。中層からは土師器・山茶碗が、下層からは須恵器片が出土し、瓦片は全層にわたって均一に少量含まれる。

4. 南門地区：6AJC-D区 (PL.11)

第9次調査において政庁南築地内溝SD37 (PL.10)が検出された部分の西隣に調査区を設定した。9次調査では、さらにその南において築地の痕跡と見られる整地層が深さ10cmにわたって認められ、南門が近接することが予想された。

東西25m・南北15mの対象範囲においてその南辺部分から北へ向けて表土除去・遺構検出を進め、南門及びその他の遺構の検出を目指した。遺構検出面はI層を除去したII層ないしIII層上面で、その深さは南辺で約13cm、北辺で約31cmである。調査区南辺で基礎地形(SB97)・足場穴SP98~102・溝SD95~96が検出されたが、北半には全く遺構が認められなかった。SD95~96は完掘し、足場穴SP98~102は5cmほど掘り下げ、SB97は一部を断ち割った。

建物SB97 瓦葺礎石建物の政庁南門である。基礎地形のみ残存し、礎石掘え付け痕は認められない。

東西は15.4mで、南半は調査区外に延びる。掘り込みの深さは検出面から約60cmで、やや乱れた版築がなされる。北辺に沿って5基の足場穴があり、東西には築地南内溝から北へ短く延びる溝SD95・96がある。9次調査において溝SD37から出土した礎石は南門のものである可能性が高い。

基礎地形の検出面には径10cm大の礫が認められる。版築中には瓦を含まず、底面は凹凸が著しい。断ち割り範囲を見る限り、前身遺構の痕跡は観察できない。

柱SP98~102 足場穴と想定される。SP98・102は基礎地形の北東及び北西角に位置し、SP99~101は北辺に並ぶ。おおむね径22~28cmの円形であるが、SP100は短径28cm・長径34cmの長円形を呈する。埋土には基盤層に由来すると見られる黄褐色土が入り込む。抜き取りの際、深く沈下した柱部分に別の土が充填されたものと考えられる。

それぞれの間隔はSP98・99が3.5m、SP99・100が3.9m、SP100・101が3.9m、SP101・102が4.3mである。中央の3基は柱間の延長線上に位置するものであろう。

溝SD95 建物SB97の西に位置する南北溝で、築地南内溝に接続すると見られる。北端及びSB97側は大きく崩れる。幅5m以上で、検出面からの深さは約60cmである。

埋土は大きく3層に分かれる。上層は約30cmを測り、全く締まりが無く、底面に軒瓦などの瓦類を多く含む他、近世陶器を少量含む。中層下面にも瓦の集中が認められ、以下当初の堆積と見られる下層が続く。上層は近世以降の開発に伴う堆積であろう。

溝SD96 建物SB97の東に隣接し、政庁南築地内溝SD37に接続する。検出面からの深さは約20cmで、さらに調査区外は深くなるものと思われる。SD95に対応する位置にあるが、北端はSD95のように直線的とはならず、小土坑が付加されたような歪な形状をなす。

瓦片が少量出土したのみであるが、隣接する溝SD37からは第9次調査において完形に近い軒瓦が多く出土した。

Ⅲ.出土遺物

1. 土器 (PL.19)

溝SD 87から土師器・須恵器・内面黒色土器など比較的多くの土器片が出土したが、図示できるものはない。その他の遺構は非常に土器類が少なく、土坑SK 89・溝SD 90・95・96から土師器・須恵器片などが少量出土したのみである。須恵器長頸瓶(27) 溝SD 90出土で底部のみ残存する。底径88mm。高台は「ハ」状に開き、外縁が接地する。

山茶碗(28) 溝SD 04中層の下位から出土。推定口径158mm。体部は丸みを帯びる。高台は欠損。参考資料 第9次調査SD 37から須恵器坏蓋(26)が出土している。

2. 瓦(PL.12~19)

溝SD 87・88・04・39・90・95・96から瓦類が出土した。とくに溝SD 90上層や95上層は出土量が多く、それぞれ建物SB 91・97に由来するものと考えられる。瓦当面が残る軒瓦片は軒丸瓦が2点、軒平瓦が3点である。溝SD 39・90には政庁域で見られるような小型の丸瓦・平瓦は見られず、文字瓦9点が出土した。9点の内5点は「人」である。

軒丸瓦(4・5) 4は溝SD 95出土。IA 2型式の重圏文。焼成悪く、淡黄灰色を呈する。

5は溝SD 90出土。IA 3型式の重圏文。焼成は悪く、淡灰褐色を呈する。

軒平瓦(6・7・11) 6は溝SD 87出土。IA 2型式の重廓文で、須恵質。

7は溝SD 95出土。II A 1型式の唐草文。明橙褐色を呈する。

11は溝SD 95出土。IA 2型式の重廓文で、長さ353mm・幅333mm。瓦当面両脇は整形段階でカットされる。凸面には瓦当から108mmの部分に朱線を有する。軟質の須恵質。

文字瓦(16~19・21~25) 16~19・21~24は溝SD 90、25は溝SD 39出土。

16~19は丸瓦凸面に押された「人」陽刻である。いずれも胴部辺縁部に押印されている。橙褐色を呈するものが多い。16は印面径26mm・深さ1mm。17は深さ1mm。18は印面径26mm・深さ1mm。19は深さ3mm。

21は平瓦凸面に押された「人」陽刻で、印面径26~28mm・深さ2mmである。

24は丸瓦凸面に押されている。判読不可能である。印面径は23~24mm・深さ1mm。

22は丸瓦凸面に押された「上」陽刻。印面径25mm・深さ2mmである。

23は平瓦凸面に深く押された「上」陽刻。印面径24~26mm・深さ5mm。

25は平瓦凸面に押された「丁」と読まれる陽刻である。印面は歪な方形に近い不整形を呈する。焼成は悪く、黒褐色を呈する。印面径29~31mm・深さ2mm。

参考資料 6AJC-A・6AJC-D区では瓦を含む溝SD 39・90・95が検出されたが、細片が多かった。それに対して隣接する9次調査の連続する遺構からは残りの良い瓦が豊富に出土した。以下は9次調査出土の瓦である。

1~3は溝SD 37出土の軒丸瓦で、1はIA 1、2はIA 2、3はIA 8型式である。IA 8型式は、IA 3に似るが、瓦当面がひとまわり小さく、胴部は反る。今のところ溝SD 37以外では知られない。

8・10・12は溝SD 37出土の軒平瓦で、8はIA 3、10はIA 1、12はIA 4型式である。

9は溝SD 37、14は溝SD 39出土の丸瓦である。9は胴部外面がタテに調整され、長さ413mm・幅142mmである。14は政庁以外で一般に見られる大型のもので、長さ383mm・幅181mmである。外面の一部に朱が付着する。

13・15は溝SD 37出土の平瓦である。13は政庁付近で一般的な小型品で、長さ380mmである。15は湾曲の大きい大型品で、長さ399mmである。

20は9次試掘トレンチ14出土の文字瓦で、印刻の「人」である。印面径23~25mm・深さ1mmである。橙褐色を呈する

3. 瓦の分布状況

第11次調査までの軒瓦の型式別・地点別出土点数は別表のとおりとなった (Tab. 4・5)。

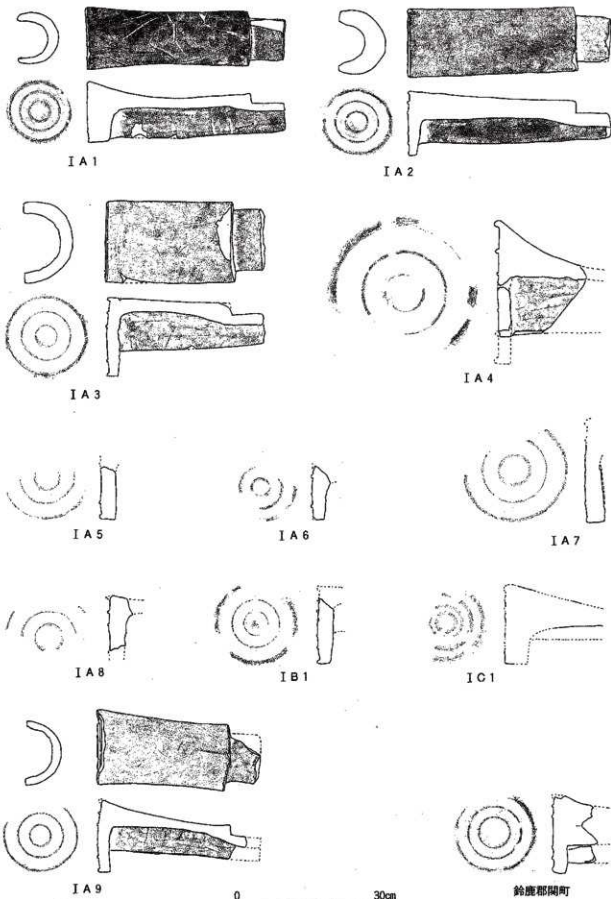
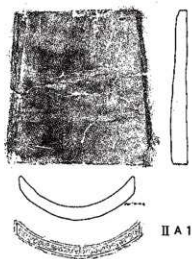
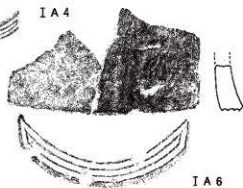
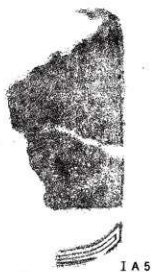
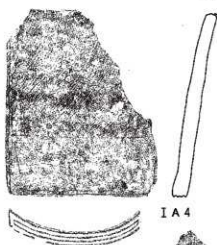
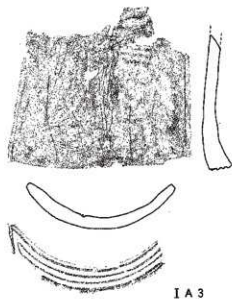
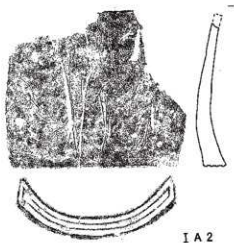


Fig.1 軒丸瓦の型式(1:8)



0 30cm

Fig.2 軒平瓦の型式(1:8)

Tab.4 軒瓦一覽

軒丸瓦 型式名	法 量 mm						地点別個体数				特徴など
	瓦当径	瓦当厚	第1圈径	第2圈径	第3圈径	第4圈径	矢下	長塚	南野	仲起	
IA1	129	50	114	77	37	—	35	4	0	0	三重圈。瓦当径では最小。 瓦当部は厚い。胴部は外反する。色調は淡褐色を呈するものが多い
IA2	140	29	127	82	39	—	7	0	0	0	三重圈。胴部は肉厚。淡黄灰色を呈するものが多く、軟質
IA3	167	30	153	98	40	—	11	1	0	1	三重圈。灰色を呈する。須恵質で硬質のものが多い
IA4	296	23	不明	不明	69	—	1	0	0	0	三重圈。瓦当径では最大。胴部は反る。淡黄褐色を呈し、軟質。素材粘土の調整痕が残る
IA5	180	31	不明	104	106	—	0	2	0	0	三重圈。暗灰色を呈し、軟質。胴部は外反するらしい
IA6	147	37	不明	78	31	—	0	1	0	0	三重圈。淡褐色を呈する。圏線が大きい。瓦当径や圏線のノランスはIA2に類似する
IA7	218	不明	不明	127	56	—	0	0	1	0	三重圈。淡灰色を呈し、軟質。瓦当径はIA4に次いで大きい
IA8	153	33	142	88	40	—	2	0	0	0	三重圈。淡灰色を呈し、須恵質。胴部は外反する
IA9	182	35	不明	不明	52	—	0	1	0	0	三重圈。淡灰色を呈し、須恵質。瓦当径はIA5に近いが、第3圏は大きい
IB1	167	26	不明	不明	42	—	3	1	0	0	三重圈。中央に珠点を有する。軟質・硬質がある。中央珠点は極めて低い。かぼとんど残存しない。外縁は丸みを帯びる
IC1	164	44	不明	不明	57	28	0	2	0	0	四重圈。橙褐色を呈する。圏線は扁平で、太い
軒平瓦 型式名	法 量 mm						地点別個体数		特徴など		
	瓦当幅	瓦当厚	第1廓幅	第2廓幅	右脇幅	左脇幅	矢下	長塚			
IA1	267	32	20	4	4	4	14	5	二重廓。直線額。色調は軒丸瓦IA1に似て、橙褐色を呈するものが多い。彫りが深く、圏線の断面は三角形。凹面と瓦当面の角度が大きい		
IA2	343	46	28	7	6	6	40	9	二重廓。曲線額。灰色・暗灰色を呈し、須恵質のものが多い。脇外縁が削られている例がある。		
IA3	330	47	28	4	3	3	3	8	二重廓。曲線額だが、角度が緩い。淡黄灰色で、軟質。文様は丸みを帯びる		
IA4	275	32	19	4	4	6	13	2	二重廓。直線額と曲線額のものがある。最も小型。淡灰色を呈し、須恵質。文様の断面は矩形を呈する		
IA5	282	32	19	4	4	4	5	0	二重廓。直線額。淡黄灰色を呈し、軟質のものが多い。IA4と類似する。IA4より脇幅が狭い。中央は直線的で両端がやや屈曲する		
IA6	348	48	31	6	7	5	0	11	二重廓。曲線額。淡黄灰色を呈し、軟質のものが多い。最も厚い。第2廓は第1廓より鋭角で、相似形とならない		
IIA1	270	44	23	16	2	2	7	0	唐草文。平城宮6719Aと同范。直線額。焼成・色調はIA1に似る		

※界線は外側から中央に向かって数え、内法を計測。

Tab.5 軒瓦地点別出土点数

軒瓦		IA1	IA2	IA3	IA4	IA5	IA6	IA7	IA8	IA9	IB1	IC1	不明	合計		
長者塚敷 遺跡	矢下地区 (政庁)	後殿SB03											1	1		
		西胎殿SB05			5							1		5	11	
		北軒廊SC01												2	2	
		東内溝北SD05-1	2		4	1								2	9	
		東内溝南SD05-2		1											1	
		西内溝北SD09-1	17	2											19	
		南内溝東SD37	1	1						2					6	
		南門西溝SD95		1											1	
		西隅柱土坑SK04	3	1								1			2	7
		西隅柱南溝SD12	9		2										1	12
	表採・その他	3	1								1				5	
	小計		35	7	11	1				2	3			15	74	
	長塚地区	大溝SD23	2				1				1				5	
		溝SD41			1										3	
		溝SD42													1	
		土坑SK24	1												1	
		土坑SK57	1									1	1		3	
表採・その他						1	1						1	5		
小計	4		1		2	1			1	1	2		18			
南野地区	建物SB08							1						1		
仲起地区	溝SD90			1										1		
表採・その他			2											2		
総計		39	9	13	1	2	1	1	2	1	4	2	21	96		
伊勢国分寺跡			1											3		
国分遺跡														1		
八野遺跡			1											1		
八野瓦葺跡		1												1		
総計		40	11	13	1	2	1	1	2	1	4	2	25	103		

軒瓦		IA1	IA2	IA3	IA4	IA5	IA6	IIA1	不明	合計	
長者塚敷 遺跡	矢下地区 (政庁)	正殿SB06	2							2	
		後殿SB03	1	1						2	
		西胎殿SB05	1	1	2						4
		北軒廊SC01	1	2		2	1		1		7
		西軒廊SC02		2					1		3
		西築地SA03				1					1
		東内溝北SD05-1		20							20
		東内溝南SD05-2		1						1	2
		西内溝南SD09-2	2			7	2		1		12
		南内溝東SD37	1	1	1		1				4
	南門西溝SD95		1					1		2	
	西隅柱土坑SK04	1	3			1				5	
	西隅柱南溝SD12	5	3		3			3		14	
	表採・その他		5							5	
	小計		14	40	3	13	5		7	1	83
	長塚地区	大溝SD23	1	2	1			3		1	8
		溝SD41		4				2			6
土坑SK24		1	1	7			1			10	
土坑SK56							2			2	
土坑SK57		2			1		2		1	6	
足場穴SP45							1			1	
表採・その他		1	2		1				1	5	
小計		5	9	8	2		11		3	38	
表採・その他			5				1	1	5	12	
総計		19	54	11	15	5	12	8	9	133	
伊勢国分寺跡										1	
国分遺跡			2							2	
八野遺跡										1	
不明					1					1	
総計		19	56	11	16	5	12	8	11	138	

IV.まとめ

1. 政庁東方地区 (6AJA-H・6AJA-FG)

当地区は、土器類が比較的多く分布する地点とされていたため(村山1992)、これまで確認されている政庁や長塚・南野地区とは性格の異なる建物群の存在が想定されていた。近江国庁東における建物群との比較を試みる上でも絶好の地点と考えられ、調査区を設けることとなった。

調査地は政庁から東の開析谷へ向けて徐々に標高を減じており、そのためかⅡ・Ⅲ層は残存しておらず、検出された遺構は溝2条と土坑1基のみであった。掘り込みの浅い基礎地形であれば、跡形もなく削平されてしまった可能性も考えられる。

検出された遺構の時期は、埋土や出土遺物から見て国府に並行するものと判断される。2条の溝はほぼ方位を座標北に揃えていることから、国府に関連する遺構なのであろう。これらが建物群に付随するものか否かは今回の成果だけから判断できない。溝の幅や形状から類似したものを探すとすれば、長塚地区のSD26があげられる。

2. 建物SB91 (仲起地区・6AJC-A)

政庁以外の礎石建物としては7例目、掘立柱建物を含めると8例目となった(Tab.7)。伊勢国府で検出された礎石建物はすべて基壇を有するものと考えられる。政庁以外で礎石そのものや礎石の抜き取り痕が検出されたのは、南野地区のSB01のみで、他は全て基礎地形が検出されているだけである。

政庁院の建物基壇は、専ら築地内外の溝を掘削して得られた土によって築成されているため、基壇に接する溝は少ない。それに対して、南野・長塚地区の建物には、基壇に接して溝が設けられるものもそうでないものがある。前者の例としては南野のSB01・08や長塚のSB27・40が、後者の例としては長塚のSB44・47がある。今回検出されたSB91は前者の例に含まれる。

建物の柱間や規模を推定する材料は、これまでの例と同様非常に乏しい。溝SD39・90、足場穴と考えられるSP92~94、9次調査の試掘トレンチなどから導き出すとすれば、Fig.3がひとつの案として想定できる。SP92・94が柱通りに相当するとしたとき、SP93は柱間の延長線上にあたり、梁行の柱間は3.3mと11尺とする

ことができる。調査区の北から西にかけて鈎の手に屈曲する現在の水路が建物及び周囲の溝に規制されていたものと考え、梁行は4間程度が適当と思われる。東西は、SD39と試掘トレンチ14で検出された溝の屈曲部分の距離約24mを軒の出も勘案して配分すれば、10尺等間で、桁行7間とすれば取まりが良い。7間×4間の四面庇付き建物を想定しておきたい。

溝SD90から出土した瓦が建物SB91に由来するものであれば、総瓦葺であった可能性が考えられる。今回出土の瓦資料は破片が多いが、隣接する9次調査C区で得られた完形丸瓦は政庁以外の建物で多用される大型型であり、長塚・南野地区との共通性が指摘できる。

建物の時期についてはこれまで同様決め手に欠ける。廃絶時期については他の建物群同様8世紀末ないしは9世紀の早い段階として矛盾はなからうか。

3. 溝SD04 (政庁西外溝)

3期に大別される埋土の観察から、中世以前においては溝の形状がほとんど維持されたまま安定していたものと思われ、台地の土地利用をめぐる画期が中世と近世以降にあったことが推測できる。

4. 建物SB97 (政庁南門)

基礎地形の規模及び溝SD95・96の位置から南門基壇の東西規模を求めれば完尺寸に近い15.6mほどと想定できる。正殿や後殿など政庁の柱間に多用される12尺を基準とすると、桁行は脇12尺、中央15尺、全長39尺となる八脚門が妥当なところであろう(Fig.4)。梁行は12尺+12尺で、基壇の南北規模は36尺と想定すると、基壇南辺は4.6尺方眼上に一致する(Fig.5)。

9次調査の溝SD37から出土した礎石は南門に使用されていた可能性が高い。

5. 軒瓦

瓦当を残す軒瓦としては溝SD87から軒平瓦IA2が、溝SD90から軒丸瓦IA3が、溝SD95から軒丸瓦IA1・軒平瓦IA2・IIA1が各1点ずつ出土した。

平城宮6719Aと同形の軒平瓦IA1は相変わず政庁のみに分布が限られ、都城との比較を通して政庁の造営時期をうかがい知ることができる唯

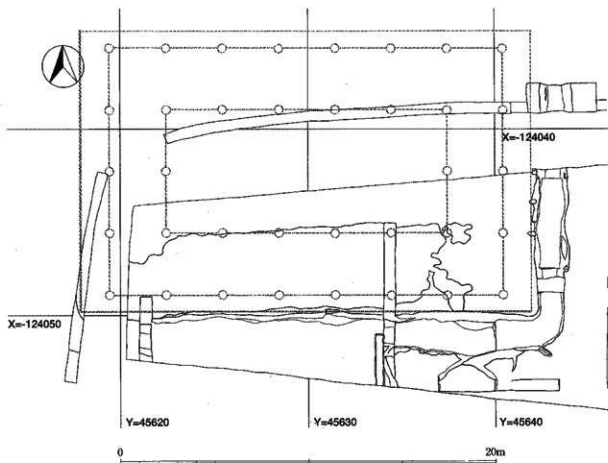


Fig.3 建物 SB91の想定プラン(1:200)

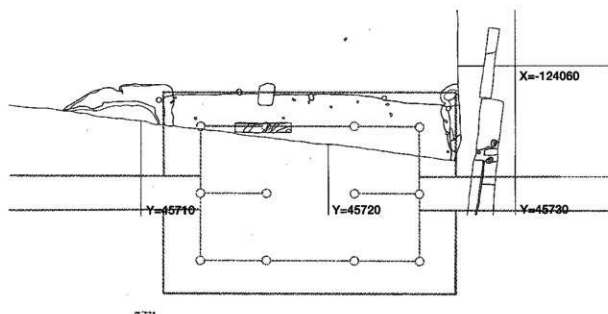


Fig.4 建物 SB97の想定プラン(1:200)

一の資料である。その他はいわゆる難波宮式系の重圍・重廊文であるが、伊勢国府跡全体では、重圍文軒瓦が11型式、重廊文軒瓦が6型式知られ、決して単純な様相を示さない。中には軒平瓦IA2・IA6・IA3のように相似形の文様構成が崩れていく型式変化が読みとれるものもあり、伊勢国衙への瓦供給に時間幅を考える余地がある。もっともその時間幅が具体的にいかほどであるかを検証するには、飛躍的な資料の充実を期待せねばならない。

6. 文字瓦

仲土居屋敷遺跡における文字瓦の分布は北西部の仲土居・長塚地区に集中する(村山1992)。

過去の調査区では政庁で不明品が1点、南野地区で「巴」・「水」が各1点、長塚地区で「人」(陰刻)が2点、「宿」が1点、「中」に似た記号が1点、不明の印を2箇所施印したものが1点出土している。いずれも分布調査ではとくに文字瓦の集中が見られなかったところである。

今回仲起地区で出土した文字別の内訳は「人」が5点、「上」が2点、「丁」が1点、不明が1点であり、6AJC-A区に隣接する9次試掘トレンチ14からは「人」(陰刻)が出土している。これまで「人」「上」「丁」は仲土居地区に分布の中心があることが知られていたため、これまで文字瓦自体の分布が希薄であった当地点が新たな集中地域として数えられることとなった。

7. 政庁の建物配置と規格 (Fig. 5)

伊勢国庁は、正殿・後殿・脇殿が軒廊で結ばれ、周囲を築地塀で圍繞されることが分かっている。築地塀の内外には溝が設けられ、東西の外溝は幅18.6mに及ぶ。さらに北西及び北東には櫓状の建物が想定できる塚がある。今回の調査では南門が確認されたわけであるが、南門と正殿までの間に構造物が確認できないことも今回明らかとなった成果である。

政庁は、46尺方眼に基づき各建物の建設・配置が行われたことが示唆され、外溝を除く東西がちょうど6マス分に収まる(辻1996)。

今回の南門の確認により、南北は8マス分となることが推定される。その結果南北及び東西の中軸線は、北軒廊と東西軒廊の中心を通って交差することとなる。この交点と脇殿の南北中軸線までの距離92尺(=46尺×2)が政庁造営の基準グリッ

ドであったのかもしれない。実際には脇殿の南北中軸線や後殿南平を起点として設計された可能性が高いものと考えられる。建物の規模や柱間は別表のとおり規格性が高く、完数尺によっている(Tab. 6)。

この中で南限の分かっていない脇殿の桁間数は、近江国庁での想定を参考にした。近江における政庁建物を基準上に無理なく収めるには、正殿・後殿・軒廊の桁行・梁行及び脇殿の桁行における柱間を伊勢国庁より1尺ずつ減じるのが妥当で、基準となる方眼は41.75尺ないしは83.5尺となる(辻1996)。

伊勢国庁における今後の課題としては、脇殿の南限、東・西・北における門、北築地内溝、南築地外溝、東西隅楼の確認などがあげられる。

8. 政庁及び周辺官衙の配置パターン

これまで検出された政庁以外の礎石建物群も含めSB91の性格については、今後も議論が必要であろう(註1)。これらが全て「館」とされるものなのか、あるいは他に対比しうるものがあるのか、さらには文献上に表れない施設であるのか様々な検討が必要である。築地塀に囲まれた中庭部を内郭とし、その周囲に外郭施設が配置される外郭官衙型の配置パターンも考慮すべきであろう。

遺跡北西部の調査で提唱された南北6区画・東西5区画の方格地割(宇河1997)について様々な疑問点があることはすでに指摘されたとおりである(新田1999)。政庁周辺における調査成果を見る限り、政庁城以南における区画の想定は保留すべきであろう。実態としては、まず政庁の配置が行われ、続いて方格地割の施工と前後して長塚・南野地区などの官衙が設けられたことが考えられる。今回検出された仲起地区における建物SB91は政庁院に付加される形で設けられた外郭官衙を形成し、政庁城の基準となる46尺ないし92尺方眼に包括される可能性も検討されなければならない。

伊勢国府において、一部に120m単位の方格地割や46尺あるいは92尺の造営規格が存在したとしても、国府全体に及ぶ均質で統一した規格は存在しなかったことは確からしい。すなわち「京と宮城のような相互の位置関係を考慮した計画自体が存在しなかった」ことは明らかで、「当初から広い範囲が国府の領域として確定され条坊制の街路が施工され」たわけではない(山中1994)と云える。

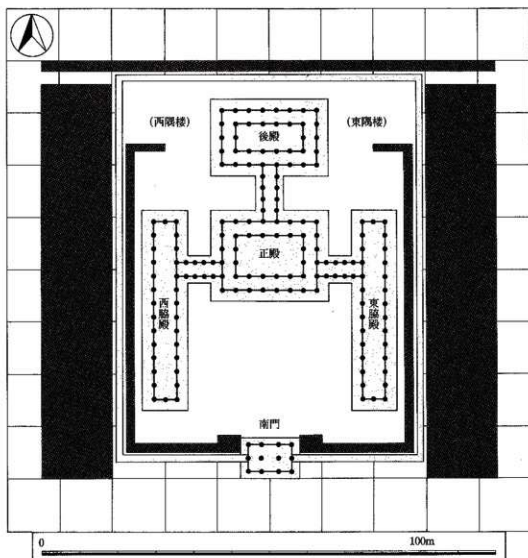


Fig.5 政庁の規格(1:4,000)

Tab.6 政庁の規格

建物	桁行			梁行			備考
	間数	柱間	全長	間数	柱間	全長	
正殿	7	12	84	5	12	60	
後殿	7	12	84	4	12	48	
東西脇殿	13	12	156	2	10	20	桁行は推定
北軒廊	5	10	50	1	12	12	
東西軒廊	5	8	40	1	12	12	
南門	3	中央15 脇12	39	2	12	24	推定

溝・築地堀ほか	幅 (尺)	備考
北外溝	9	
東西外溝	62	
東西外溝	7	
東西築地堀	12	内溝外溝間
政庁城南北	368	92尺×4
政庁城東西	276	92尺×3
政庁城東西	400	外溝含む
基準方眼	46ないしは92	

柱間・全長は尺

都市としての国府を考えると、これまで蓄積されてきた長者屋敷遺跡の調査成果から描かれる伊勢国府の景観は、あまりにも生活のにおいに乏しく、実際に国府として機能していた様子を想像しがたい。当遺跡では、国府が設けられた前後の時代における遺構・遺物が希薄で、まとまった集落が形成されるのは近世以降と思われ、しかもその位置は遺跡の中心からはずれた谷筋付近である。長者屋敷遺跡における国府遺構が9世紀以降途絶えるのも、水利等インフラ面での不首尾が原因かもしれず、言い換えれば国衛の立地そのものが地勢的条件に対する考慮に欠けた強引とも思える選定であったと評価されるのである。

註1. 8・10次の本文中、「筑後・下野・陸奥等他国の例を見る限り礎石造りの礎は想定しづらい」としたは事実誤認であり、不適当な発言であった。

【参考文献】

鈴木敏雄1933『三重縣古瓦図録』

藤岡謙二郎・西村勉男1957『歴史地理的にみた鈴鹿市東瀬台地の初期歴史時代遺跡群—軍團跡の問題と附近の開発をめぐって』『史論と美術』第279号

水野正好他1977『滋賀県文化財調査報告書第6号 新史跡近江国府跡発掘調査報告』滋賀県教育委員会

平井美典1989『近江国府再考』『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』第2号 滋賀県文化財保護協会

村山邦彦1992『鈴鹿市長者屋敷遺跡の研究』『古代学研究』第128号

古代学研究会

浅尾信1983『Ⅱ. 長者屋敷遺跡』『伊勢国分寺跡(5次) 長者屋敷遺跡(1次)』鈴鹿市教育委員会

新田剛1994『Ⅲ. 長者屋敷遺跡』『伊勢国分寺・国府跡—長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業概要報告—』鈴鹿市教育委員会

山崎信二1994『平城宮・京と同范の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』

山中敏史1994『古代地方官衙遺跡の研究』

金田幸祐1995『国府の形態と構造について』『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集

藤原秀樹他1995『Ⅱ. 長者屋敷遺跡(伊勢国府跡) 第3次発掘調査』『伊勢国分寺・国府跡2』鈴鹿市教育委員会

辻公則1996『国府政庁の規格性—近江国・伊勢国について—』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅲ

新田剛1996『Ⅲ. 伊勢国府跡(第4次)』『伊勢国分寺・国府跡3』鈴鹿市教育委員会

宇河雅之1997『伊勢国府の方格地割—その存在の可能性と意義—』『研究紀要』第6号三重県埋蔵文化センター

杉立正徳1997『5. 長者屋敷遺跡(第5次)』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅳ

杉立正徳1998『6. 長者屋敷遺跡(第6次)』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅴ

新田剛1997『Ⅰ. 伊勢国府跡(長者屋敷遺跡)(第7次)』『伊勢国分寺・国府跡4』鈴鹿市教育委員会

新田剛1998『11. 長者屋敷遺跡発掘調査概要(9次)』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅵ

伊藤明之・新田剛1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会

Tab. 7 周辺官衙の規格

建物	建物	地区	桁行			梁行				棟方向	報告書
			間数	柱間	全長	間数	柱間	全長	方位		
SB01	礎石建物	南野	8	14	112	4	身舎10 庇12	44	N1°W	南北棟	『伊勢国分寺・国府跡4』1997
SB08	礎石建物	南野	7	12	84	4	12	48	N0°W	東西棟	『伊勢国分寺・国府跡4』1997
SB09	掘立柱建物	南野	3	8	24	2	8	16	N0°W	東西棟	『伊勢国分寺・国府跡4』1997
SB27	礎石建物	長塚	10	10	100	2	10	20	N1°W	南北棟	『伊勢国府跡』1999
SB40	礎石建物	長塚	7	11	77	2	9	18	N1°W	東西棟	『伊勢国府跡』1999
SB44	礎石建物	長塚	7	12	84	4	10	40	N1°W	東西棟	『伊勢国府跡』1999
SB47	礎石建物	長塚	7	12	84	4	10	40	N1°W	東西棟	『伊勢国府跡』1999
SB91	礎石建物	仲起	7	10	70	4	11	44	N0°W	東西棟	本書

柱間・規模はすべて推定。柱間・全長は尺

Ise Kokufu Site -Preliminary Report No.2

English Summary

Contents	Page		
Introductory Remarks	1	2. Roof Tiles	5
Chapter I Introduction	1	3. Distribution of Roof Tiles	5
1. Location	1	Chapter IV Conclusions	
2. Extent and Present Condition	1	1. East Area of Kokucho	10
3. History of Excavations		2. A Building (SB91)	10
Chapter II Structural Features	3	3. A Moat (SD04)	10
1. Standard Layers	3	4. A South Gate (SB97)	10
2. East Area of Kokucho Provincial Government Centre	3	5. Eaves Roof Tiles	10
3. West Area of Kokucho	4	6. Stamped Roof Tiles	12
4. South Gate of Kokucho		7. Plan of Building Layout of Kokucho	12
Chapter III Artifacts	5	8. Layout of Governmental Offices of Ise Kokucho	12
1. Pottery		Summary	15

Color Plates

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. A Building (SB91) | 2. A South Gate (SB97) |
|----------------------|------------------------|

Figures

- | | | | |
|--|----|--|----|
| 1. Classification of Round Eaves Tiles | 6 | 4. Plan of a South Gate (SB97) | 11 |
| 2. Classification of Concave Eaves Tiles | 7 | 5. Square Grid Pattern and the Distribution of Features of Kokucho | 13 |
| 3. Plan of a Building (SB91) | 11 | | |

Tables

- | | | | |
|-------------------------------------|---|---|----|
| 1. The seat and Area of Excavations | | 5. Eaves Tiles and Features | 9 |
| 2. Structural Features.. | | 6. Structural Features of Ise Kokucho | 13 |
| 3. Excavations | 2 | 7. Architectural Features of Ise Kokufu | 14 |
| 4. Classification of Eaves Tiles | 8 | 8. Abstract | 49 |

Plates

1. Location of Sites Around of Ise Kokufu	17	19. Stamped Tiles	38
2. Location of Excavated Area		20. Excavation 6AJA-H/Excavation 6AJA-FG	39
3. Location of Excavated Area		21. Building (SB91)/ Moat (SD04)	40
4. Excavation 6AJA-H		22. Building (SB97)/ Section of Building (SB97)	41
5. Excavation 6AJA-FG		23. Excavation 6AJA-H / Moat (SD87)/ Excavation 6AJA-FG / Section of Moat (SD04)/ Conference of Supervisors / Moat (SD90) / Moat(SD39) / Section of Moat (SD39)	42
6. Excavation 6AJC-A		24. Building (SB97) / Moat (SD95) / Building (SB97) / A Post Hole (SP100) / A Post Hole (SP101) / A Post Hole (SP102) / A Post Hole(SP99) / A Post Hole (SP100)	43
7. Plan and Section of moat (SD04)	24	25. Round and Concave Eaves Tiles	44
8. Plan of Building (SB91) and Moats (SD39 and SD90)	25	26. Stamped Tiles	45
9. Section of Moats (SD39 and SD90)	27	27. Stamped Tiles and Sueki and Yamajawan Pottery	46
10. Plan and Section of Moat (SD37)	28	28. Round and Concave Eaves Tiles	47
11. Excavation 6AJC-D and Section of Building(SB97)	31	29. Round and Concave Eaves Tiles and Round and Concave Tiles	48
12. Round Eaves Tiles	32		
13. Round Eaves Tiles, Concave Eaves Tiles and Round Tile	33		
14. Concave Eaves Tiles	34		
15. Concave Eaves Tiles	35		
16. Concave Eaves Tiles	36		
17. Round Tile and Concave Tile	36		
18. Concave Tile	37		

Summary

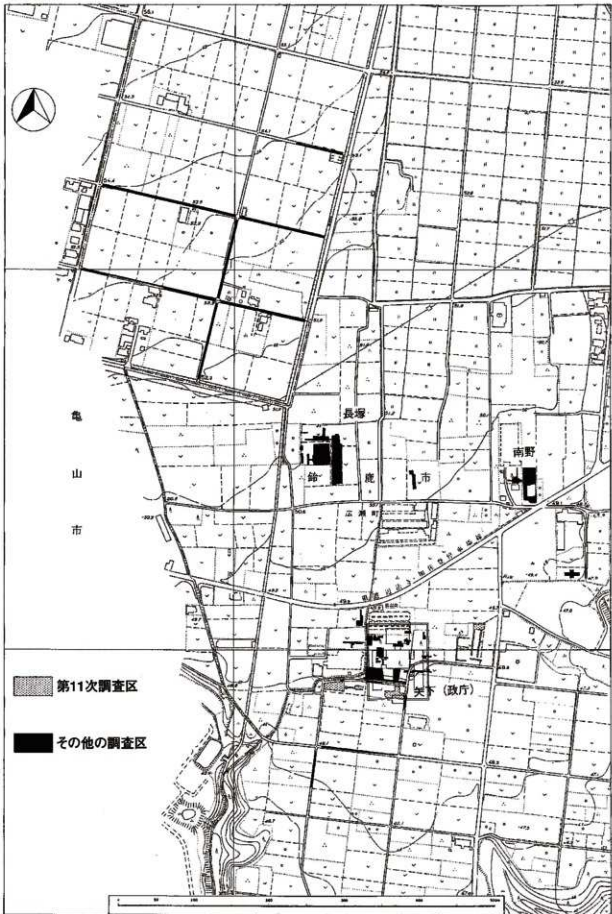
This report summarizes the excavation of Ise kokufu伊勢国府 site, also called Choja-yashiki長者屋敷 site, in the 1999 Fiscal year. This site is located at the left terrace of the Anraku River and annexed to Hirose-cho, Suzuka City, Mie Prefecture, Japan. It was been excavated since the 1992 fiscal year by the staff of the Suzuka city board of education and they found the provincial government centre (*kokucho*国庁) and the other governmental offices (*zoshi*曹司) in the Nara period. The excavated areas lies to the east and west of the *kokucho* and at the south part of it.

Two moats and a pit was found in the east area and a building, two moats around it and the part of a moat out of the west wall of *kokucho* was in the west area and a building was at the south part. It is presumed that the buildings was constructed on the earthen platform, supported by pillars built on the foundation stones and roofed with tiles. The south building is considered to a south main gate of the *kokucho* and its plan seems to have been 11.7 metres in length and 7.2 metres in width.

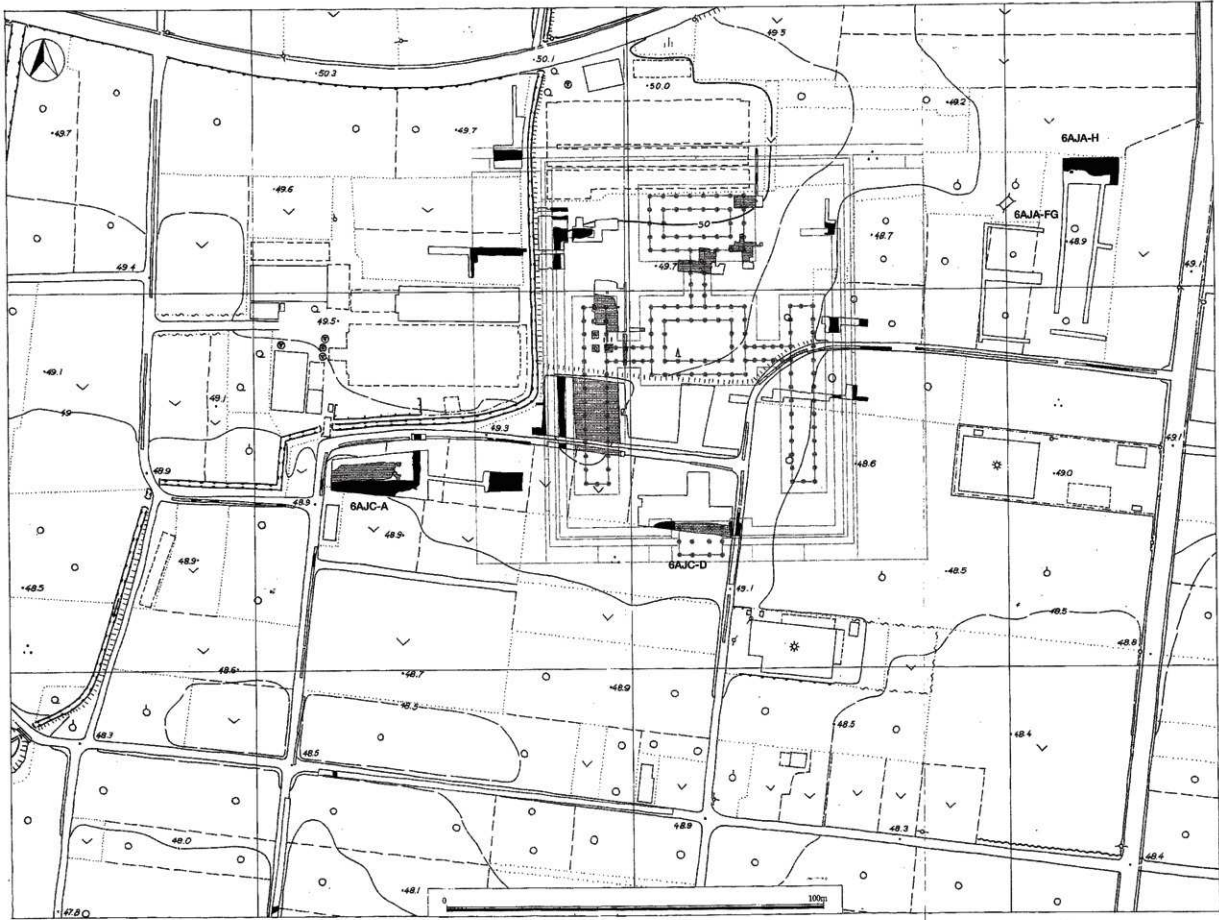


1. 伊勢国府跡 (高野原遺跡)
2. 観音冲遺跡
3. 推定鈴鹿關跡
4. 切山瓦窯跡
5. 古阪遺跡
6. 大牟遺跡
7. 八野遺跡・八野瓦窯跡
8. 国府A遺跡
9. 三宅神社遺跡
10. 天王山西遺跡
11. 津賀平遺跡
12. 畑田遺跡
13. 川原井瓦窯跡
14. 山の原遺跡
15. 山辺瓦窯跡
16. 須賀遺跡
17. 天王遺跡
18. 伊勢国分寺跡 (推定僧寺跡)
19. 狐塚遺跡 (河曲郡信跡)
20. 四分遺跡 (推定尼寺跡)
21. 木田原上遺跡
22. 寺山遺跡

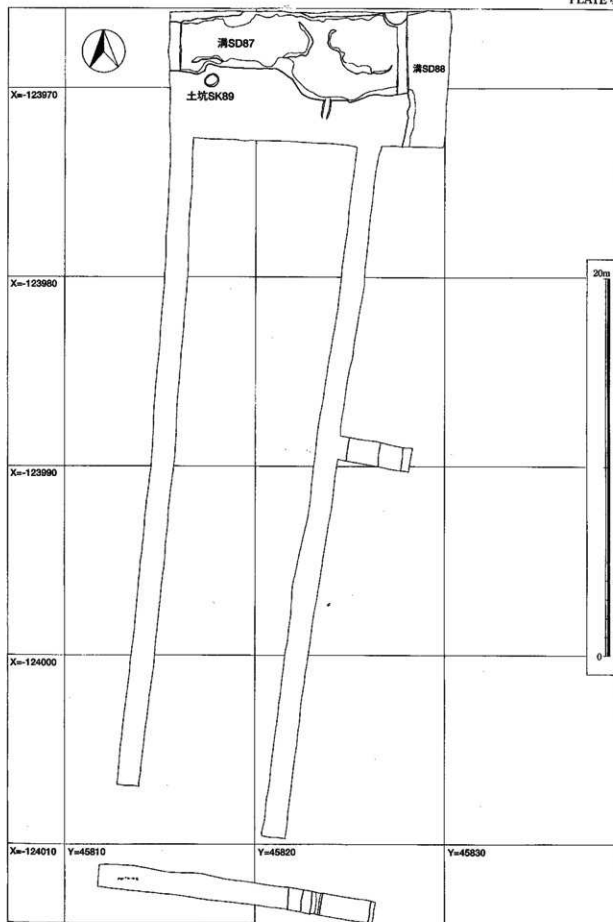
周辺の遺跡(1:100,000)



調査区位置図(1:5,000)

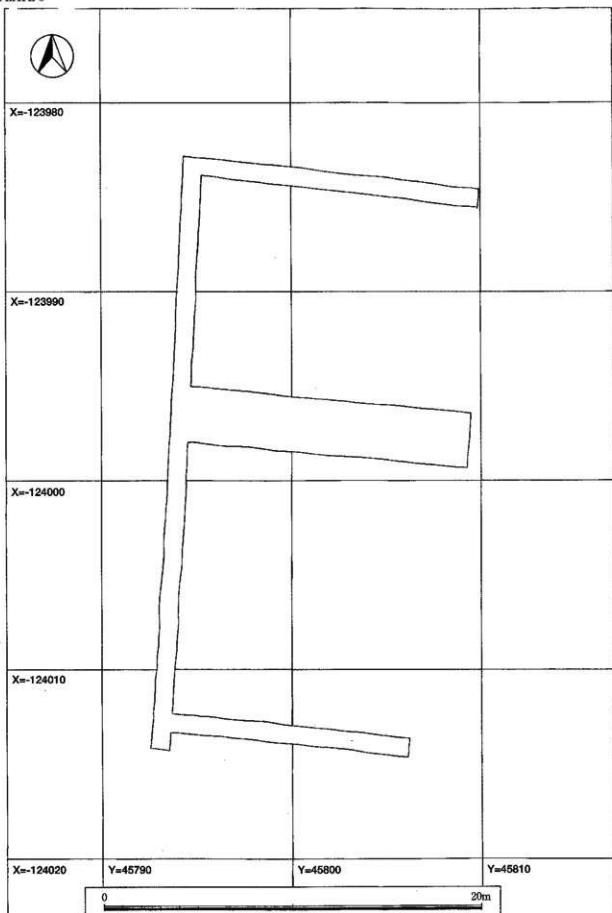


調査区位置図 (1:1,000)

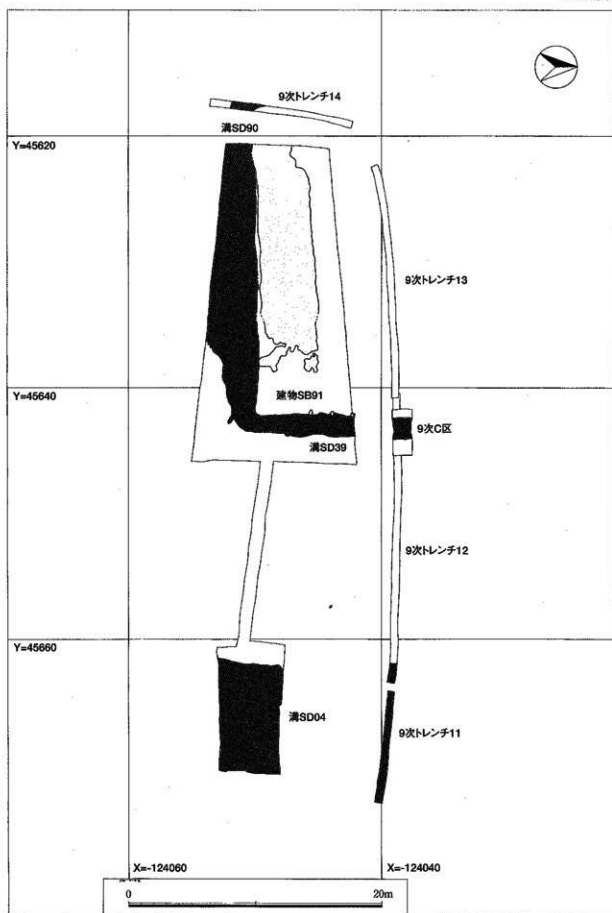


GAJA-HI区平面图 (1:200)

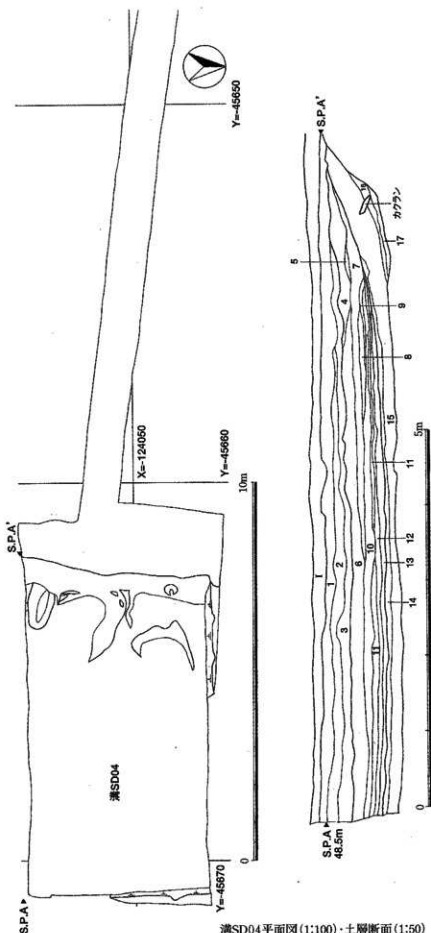
PLATE 5



6AJA-FG区平面图(1:200)

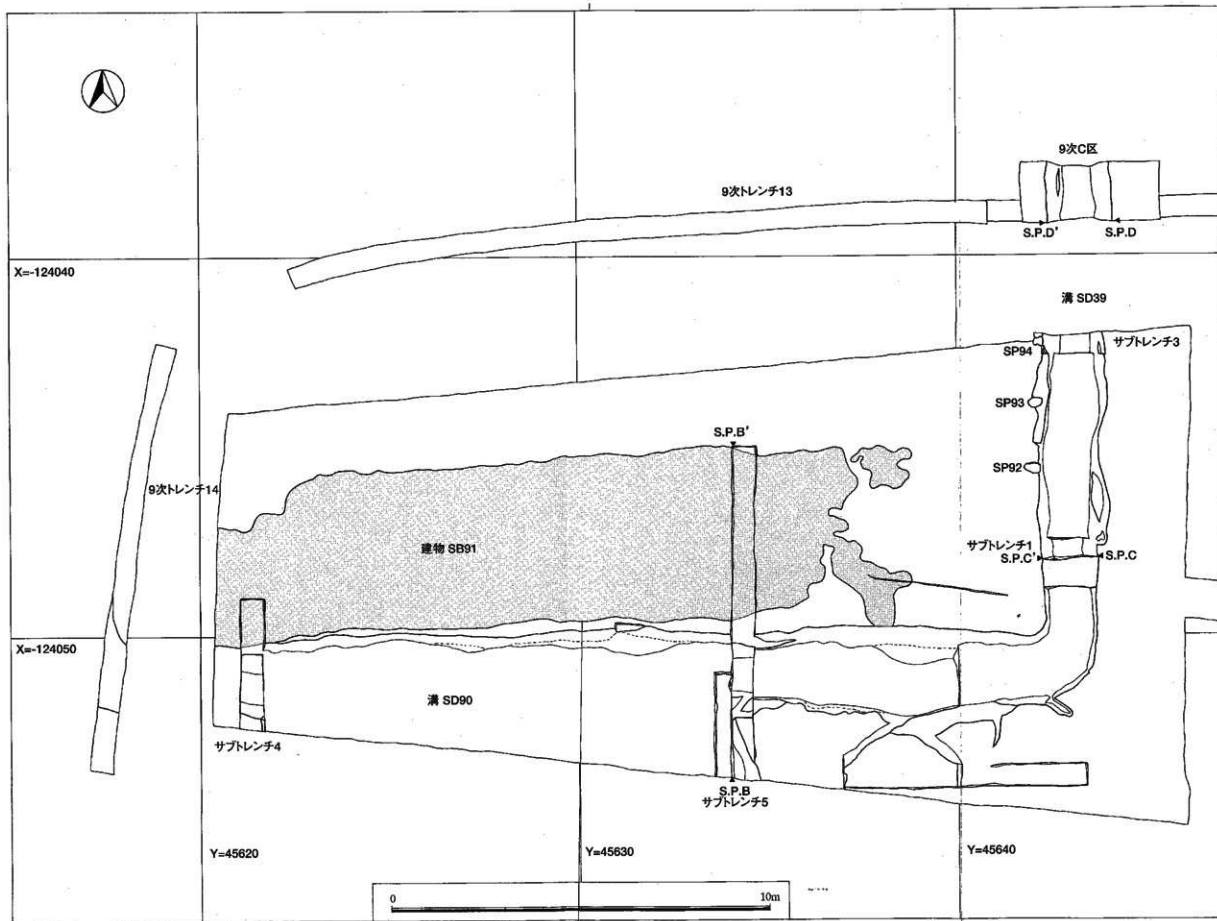


GAJC-A区平面図(1:300)

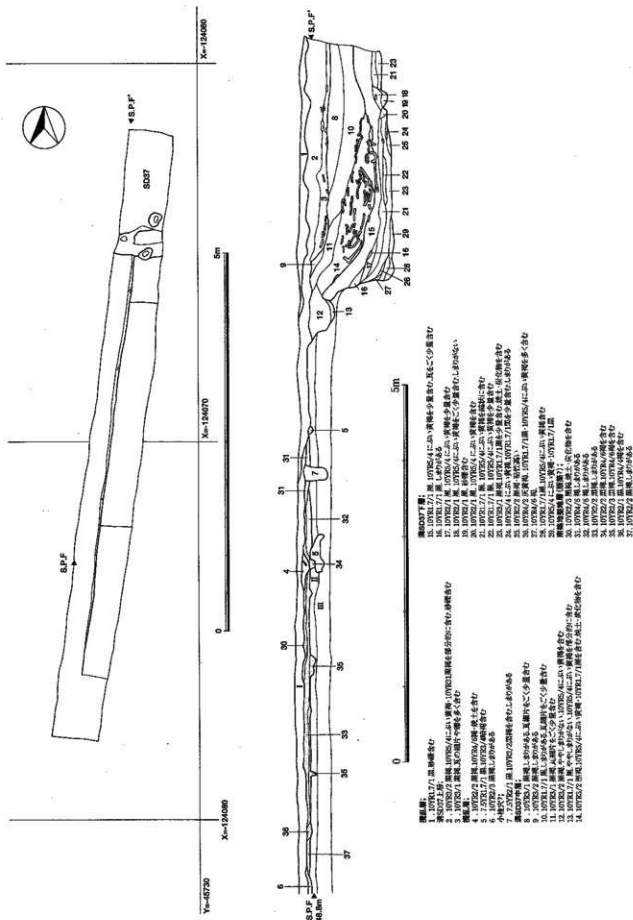


溝SD04平面図(1:100)・土層断面(1:50)

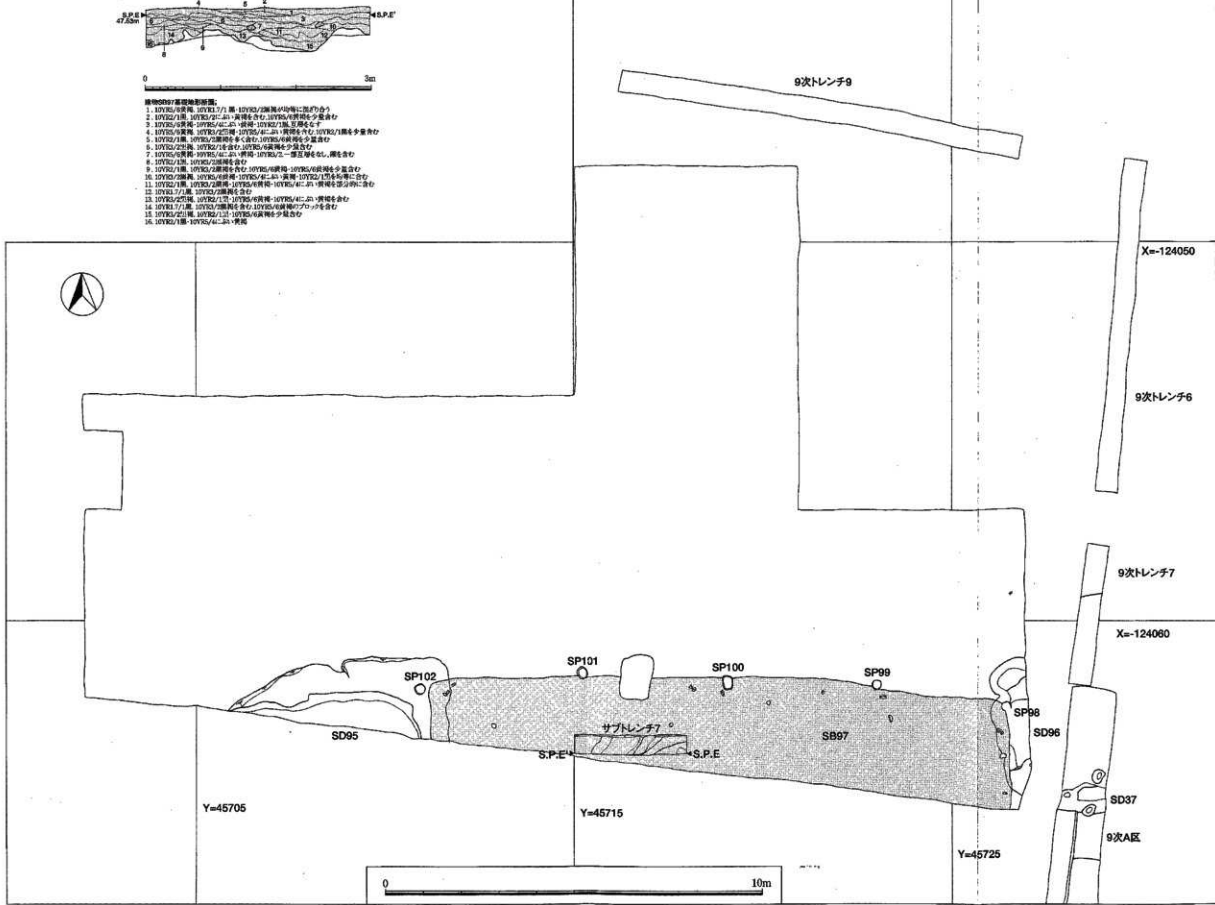
- 上層:
- 1.10782/2層位 10785/4に多い灰層を少量含む
 - 2.10782/2層位
 - 3.10782/1層位 ブロック状しまりがない
 - 4.10782/2層位 ヤマトブロック状を呈し、しまりがない
 - 5.10782/2層位 10785/4に多い灰層を多く含む
 - 6.10782/1層位 灰層を少し含む
 - 7.10782/1層位 灰層を多く含む
 - 8.10782/1層位 ヤマト色を帯びる
 - 9.10782/1層位 ヤマトしまりがない
 - 10.10782/1層位 7.5層位
 - 11.10782/1層位 7.5層位
 - 12.10782/2層位 10785/2に多い灰層を少量含む
 - 13.10782/1層位 10785/2に多い灰層を帯びる
 - 14.10782/1層位
 - 15.10782/2層位 10785/6層位の灰土を多く含む
 - 16.10782/1層位 10785/6層位の灰土を多く含む
 - 17.10782/1層位 10785/6層位 ブロック少量含む
- 下層:
- 1.10782/1層位



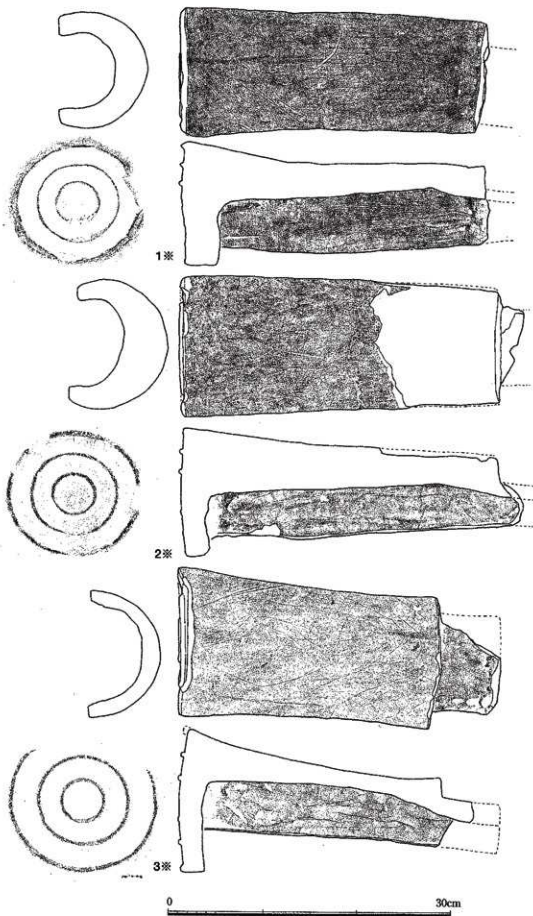
建物SB91・溝SD39・SD90平面図(1:100)



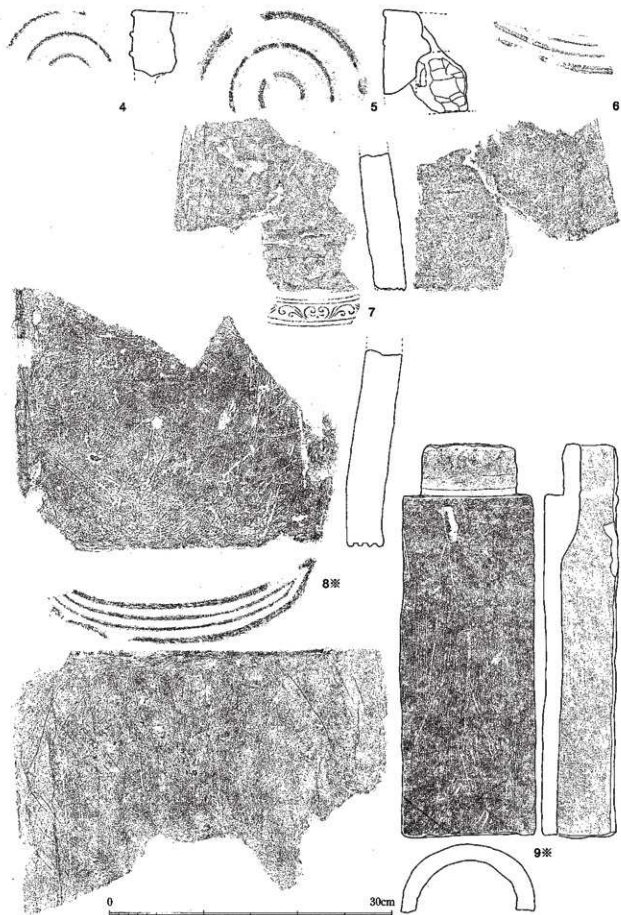
9次調査A区平面図(1:100)・土層断面図(1:50)



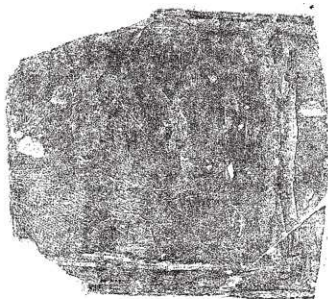
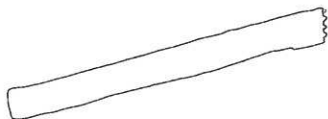
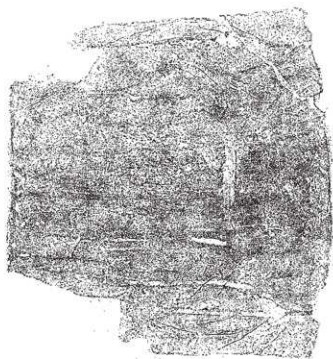
GAJC-D区平面図(1:100)・建物SB97土層断面図(1:50)



軒丸瓦(1:4)

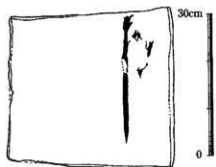


軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦(1:4)

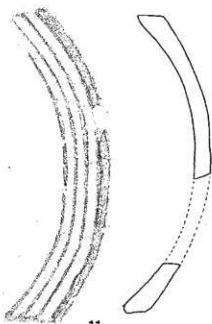
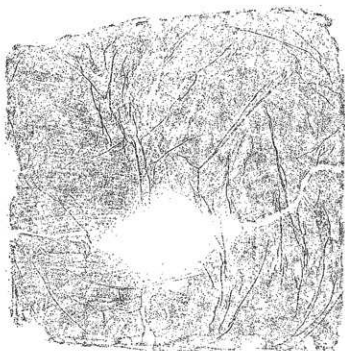
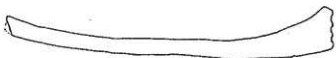


10*

軒平瓦(1:4)

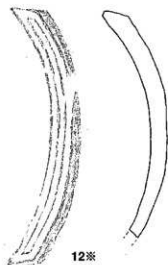
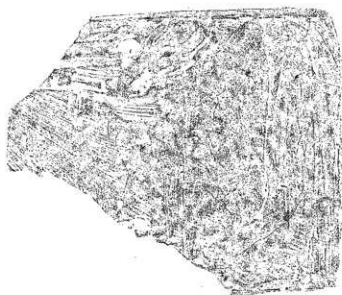
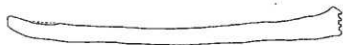
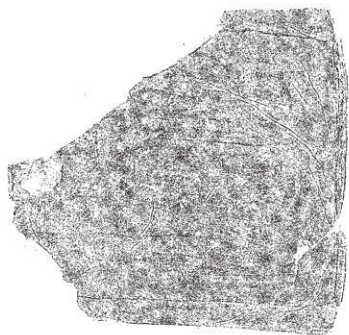


凸面における米線 (1:8)



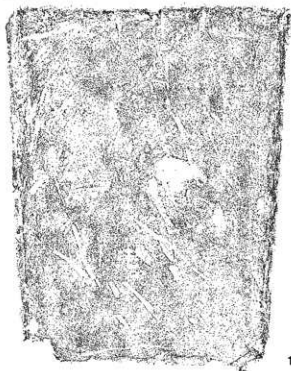
11

幹平瓦 (1:4)

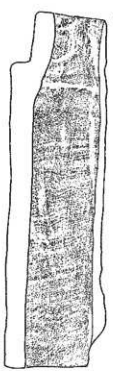
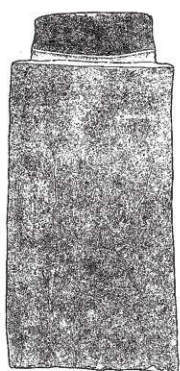
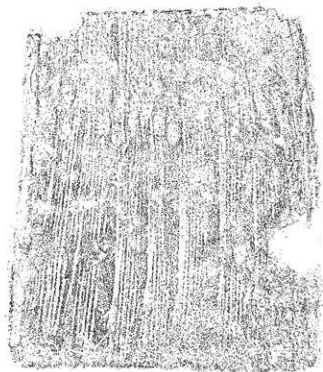


12※

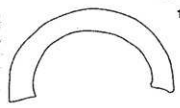
軒平瓦(1:4)



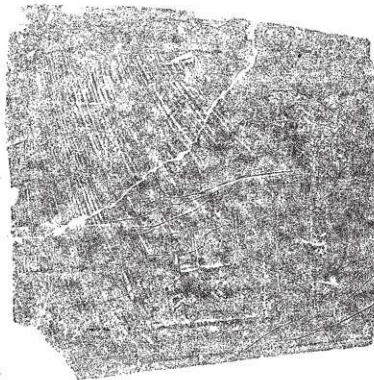
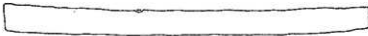
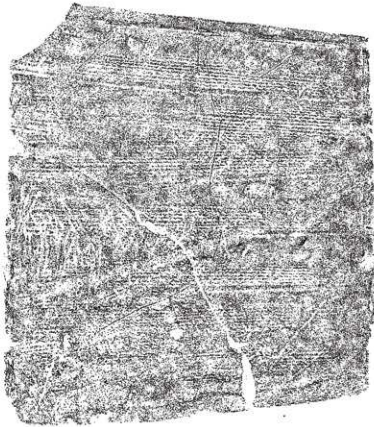
13※



14※

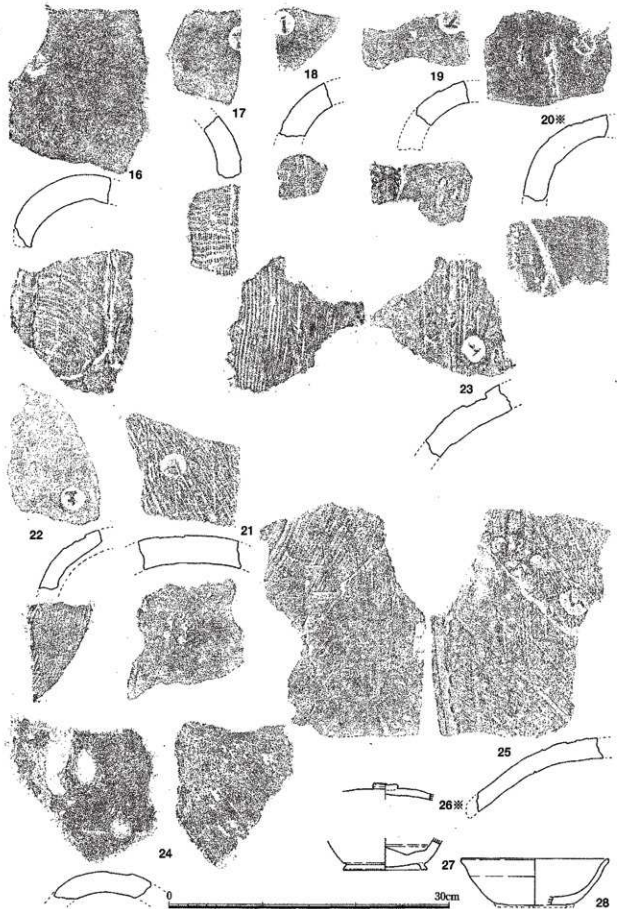


丸瓦・平瓦(1:4)



15米

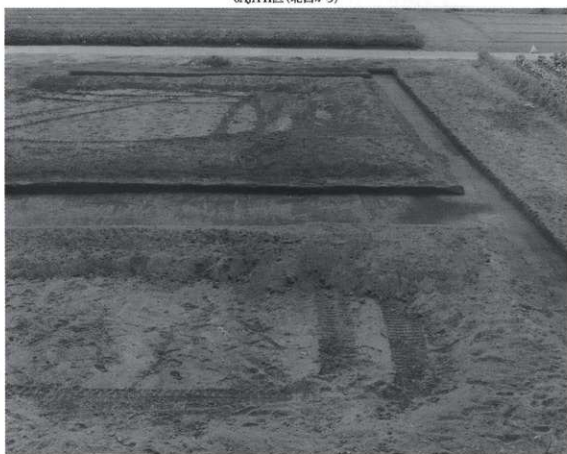
平瓦(1:4)



文字瓦・土師器・須惠器・山茶碗(1:4)



6AJA-H区(北西から)



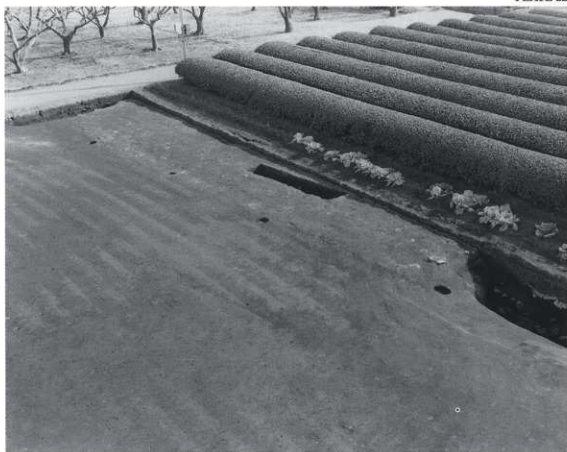
6AJA-FG区(北から)



建物SB91他(東から)



溝SD04(西から)



建物SB97(北西から)



建物SB97土層断面(北西から)

PLATE 23



6AJA-H区 (北西から)



溝SD87 (東から)



6AJA-FG (西から)



溝SD04 土層断面 (北から)



指導委員会 (南東から)



溝SD90 (東から)



溝SD39 (北から)



溝SD39 土層断面 (北から)



建物SB97 (北東から)



溝SD95 (北東から)



建物SB97 (北東から)



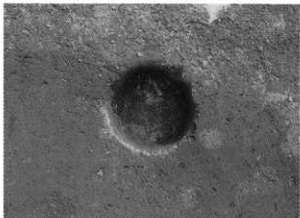
SP100 (北から)



SP101 (北から)



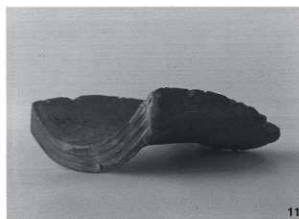
SP102 (北から)



SP99 (北から)



SP100 (北から)



軒丸瓦・軒平瓦



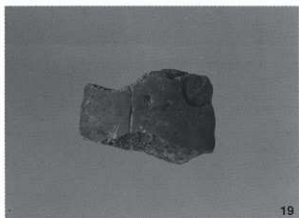
16



17



18



19



21



22

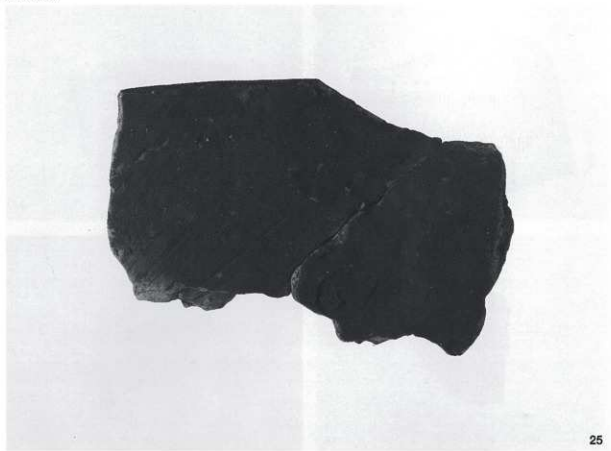


23



24

文字瓦



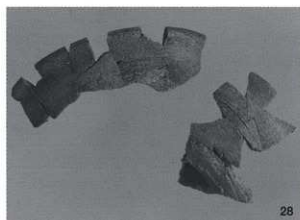
25



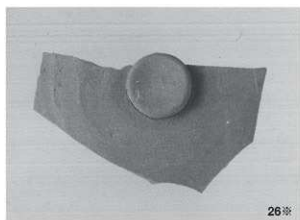
20※



27



28

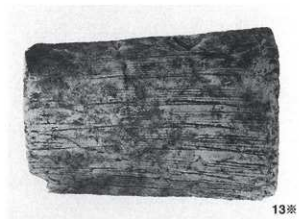
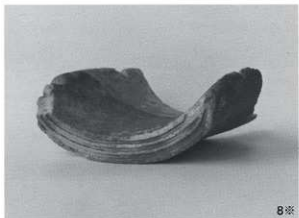
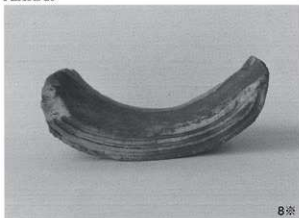


26※

文字瓦・須恵器・山茶碗



軒丸瓦・軒平瓦



軒平瓦・丸瓦・平瓦

報告書抄録

Tab. 8

ふりがな	いせこくふあと2							
書名	伊勢国府跡2							
編著者名	にった つよし 新田 剛							
編集機関	鈴鹿市考古博物館							
所在地	〒513-0013三重県鈴鹿市国分町224番地 Ⅲ.0593(74)1994							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちょうじややしき 長者屋敷	ひろせ やわろし 広瀬町字矢下 1176番・1175番 ・1175番の1・ 1093番・1130番	24207	363	34° 52′ 49″	136° 30′ 00″	19991001 ～ 20000208	863m ²	学術調査
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	官衙	奈良・平安	基礎地形(業)・溝 ・土坑・足場穴	土師器・須恵器 ・丸瓦・平瓦・ 軒丸瓦・軒平瓦		第11次調査。伊勢国府跡。 政庁の東方からは溝・土坑が、西方か らは建物基礎基礎・溝・足場穴が検 出された。政庁南辺では南門の基礎 地形・溝・足場穴が検出された。		

Ise Kokufu Site

Preliminary Report No.2

March, 2000

Suzuka City Board of Education, mie Pref., Japan